

魚類防疫に関する技術指導と研究

(魚介類安全対策事業)

古谷尚大・清川智之・沖 真徳・松本洋典・雑賀達生・岡本 満・福井克也

1. 目的

海面及び内水面の魚病被害軽減と魚病のまん延防止のため、魚病検査や水産用医薬品の適正使用の指導及び養魚指導・相談を行なう。

2. 方法

種苗生産、中間育成、養殖場等の生産施設を巡回し、疾病の対処法や飼育方法の指導・助言を行うとともに、各生産施設や天然水域における疾病発生時には現地調査、魚病検査により診断を行った。検査方法は、主に外観および解剖による肉眼観察、検鏡観察、細菌分離、PCR 検査等とした。細菌が分離された場合は、対処法および水産用医薬品の適正使用について指導を行った。

モニタリング調査として、ヒラメのクドア属粘液胞子虫 (*Kudoa septempunctata*) について、農林水産省ガイドラインおよび水産庁が作成した防止対策等に従って PCR による定期的な保菌検査を実施した。さらに、ヒラメのシュードモナス症について、種苗生産施設において PCR による保菌検査を行った。これまで種苗出荷前と中間飼育を経た後の放流前の 2 回調査を行っていたが、今年度から中間飼育を経ずに放流することとなったため、種苗出荷前の 1 回のみの調査となった。

なお、コイヘルペスウイルス (KHV) 病の養殖業者の定期検査については、2019 (令和元) 年 7 月以降は未発生水域のみを対象として行うこととしたため、今年度の検査はなかった。アユの冷水病およびエドワジエラ・イクタルリ症対策については、県外産種苗放流情報の収集と県内産人工種苗の保菌検査を実施した。

3. 結果

(1) 疾病発生状況

今年度の魚病診断件数は、海面 0 件、内水面 7 件の計 7 件であった。概要は次の通りである。

内水面では、5 月から 7 月にかけて、邑智郡川本町のアユ中間育成施設及び江津市のアユ種苗生産施設にて養成中アユから衰弱魚又はへい死魚が見られたため、合計 5 回の魚病検査を行ったところ、すべてグルゲア症と診断された。当該施設内ではグルゲア症の感染が蔓延していたことから、飼育魚の全数処分と施設の消毒が行われた。このほか奥出雲町及び邑南町の個人池において斃死したコイについて KHV の PCR 検査を実施したが、いずれも陰性であった。

(2) モニタリング調査

ヒラメの県内の種苗生産施設を対象に種苗搬出前 (放流前) において実施した保菌検査で、*K. Septempunctata* (計 20 検体)、シュードモナス症 (計 20 検体) とともに全て陰性であることを確認した。

アユの冷水病およびエドワジエラ・イクタルリ症の保菌検査 (26 件 780 尾) では、全て陰性であることを確認した。

なお、疾病発生・診断状況の詳細については、添付資料「2023 年度魚病診断結果 (海面)」および「2023 年度魚病診断結果 (内水面)」に記載した。